

令和5年度作文コンクール

安全振興会では、生徒の皆さんの安全意識の向上を図るために、「安全」又は「健康」をテーマに作文コンクールを実施しています。今年度も素晴らしい作品が多数寄せられました。清野史康委員長、米山謙副委員長、程島宏美委員、平松和夫委員、海浦洋子委員、原口瑞委員の6人の元校長先生に審査をお願いしました。最終選考会で、最優秀賞2編、優秀賞6編、佳作34編が決定されました。この中から最優秀賞に選考された作品を掲載します。

最優秀賞

健康のありがたみ

県立向の岡工業高等学校

山本 咲

みなさんは、起立性調節障害を知っていますか。症状としては朝起きられなくなり、学校に通うことができなくなることと思われるだろう。しかし、私にとってこの障害は、朝が怖くなり、家族が怖くなり、将来の希望が奪われるものだった。中学二年生の時に突然発症した。病院へ行っても気休めのように薬が処方されるだけで、全く効かず学校にも通えない。友達と疎遠になり、家でも家族に理解が得られず衝突を繰り返した。「もう自分なんかいない方がいいの。」と何度も思った。励ましてくれる人もいたが、誰にでも言える無責任な言葉としてしか受け止められなかった。

そんなある日、両親から一冊の本を渡された。障害についての本だった。理解してほしくても、上手く伝わらず苦しんできたのに、「なぜ今を渡された意図はくみ取れなかった。そのため、この本は一度も開くこともなく、静かに本棚に眠っている。」

高校の選択肢は多くなかったが、自宅から近くて通いやすく、興味のあるものづくりを学べる向の岡工業高校への進学を決めた。障害の影響もあってか、将来に人一倍の不安を抱いていた私は、できることは何でも挑戦しようと思いついた。偶然だが担任の先生がものづくりコンテストの指導者だったため、コンテストにも挑戦した。はじめは何も分からなかったが、先生が障害について理解があったこと、ものづくりをする時間は作品製作に没頭できることが、私の気持ちを少し楽にしてくれた。体力的にも精神的にも無理は求められず、毎日調子を整えて練習に臨むことが、成果への一番の近道だと教わった。

ものづくりはいきなり上手にはならないので、見通しをもって地道に取り組まなくてはならない。そのため、私の生活習慣や行動もいつの間にか先を見据えて計画的になり、自身をコントロールするのを感じた。体力もつき体調も安定した。最後の大会には、両親が来て応援してくれた。悩んでいたことが嘘のように、一つひとつが整理されていった。結局、起立性調節障害にどう立ち向かうかは、個人差もあり人それぞれだろう。ただ、確実に言えることは、そこで人生がダメになることはなく、辛さや苦しさは通過点であって全てではないということだ。諦めず人と関わる先に答えがある。今こそ客観視できるが、当時は一人で乗り越えることはできなかった。より多くの人がこの障害を理解し、支えになる必要がある。

私は将来教員を目指している。一人でも多くの生徒をサポートして健康が維持できない理由で、挑戦する場面が奪われる生徒を救いたい。両親に渡されて一度も読むことがなかったあの本を今度はしっかりと読んでみようと思う。障害を正しく知り、焦らずにという両親の思いやりを、今なら理解できるかもしれない。当たり前前になるときは気づけない「健康」のありがたみを次につなげていきたい。

最優秀賞

あおいりんご 青い林檎 あかいぶどう 紅い葡萄

県立川和高等学校

小嶋 涼香

今、あなたは試験官から十色のクレヨンと一枚の画用紙を渡されました。「林檎と葡萄を描きなさい。制限時間は十分間です。」さあ、想像してみてください。どんな絵を描きましたか。林檎は紅色、葡萄は青色にクレヨンで染めたのではないのでしょうか。

小学三年生の頃、図工の時間で果物を描くという授業がありました。私の隣の席に座る女の子は林檎を青く塗ったのです。「林檎は紅色だよ。そう決まっているもん。」何故だか不思議なことに、この出来事を今でも鮮明に覚えています。当時は発言の影響を吟味する間もなく、咄嗟に口から出てしまいました。十八歳を迎えた今、私の言葉一つが引き金となり、少女は澄んだ瞳に少しの悲しみを浮かべていたことを思い出しました。

私はコロナ禍の休校で今までは異なるライフスタイルに移ってからは、自己表現の機会が増えました。詩を唄ったり短歌を詠んだりすることが趣味の一つとなったのです。複数の仮説がありますが、二千年前の弥生時代から形造られたとされる日本語。その言語を使用し、自らの芯深くに潜む感情のような何かを表出して形に残す。本来なら自分の中でしか存在しなかった目に映らぬものを他者に伝える、それが何処か気持ちを高揚させ、たまたまずつペン走らせてしまいます。私が「生み出す経験」を感じたのは「表現は自由だ」と言うことです。

表現することとは自分を持つことでもあります。他者とコミュニケーションをとる、支え合っていないと生きていけぬ人類。そんな私たちは心の健康を保つ為に、今日も絵や言葉、身体を通して自己の表現をします。「個性を認める」というワードがキャッチコピーのように飛び交う現代で、「認める」の本質は「否定しないこと」ではないかと、ふと考えました。少女が林檎は青い、葡萄は紅いと想像したのならそれを否定しない。だからと言って無理に受け入れる必要もありません。「みんな違ってみんないい」という言葉があるように、考えが違ふことは、個々が生まれ育ったバックグラウンドが異なる為、極めて自然なことです。匿名でのネット書き込みが普及し、無地の淡かな画面背景に整った文字が列を成して並んでいる光景が日常の一部となった今、顔が見えぬ分、言葉を用いて簡単に相手を否定することができるようになってしまいました。自身の想定の枠からはみ出た出来事を体感したときに否定せず、新たな視点を知り得たと捉えることだと実感しました。それぞれが抱く個性の色を大切に育み、温めていける環境に皆が身を置くようにしたい。いや、してみせます。

今、私が口にしたのは青い林檎、紅い葡萄。